
ストーヴ

字紀 彦助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ストーヴ

【Nコード】

N4114A

【作者名】

字紀 彦助

【あらすじ】

ちよっとしたSSです。

石油ストーヴがなかなか点かないので、原沢は無性に腹が立っていた。

なんでもないボロ屋、部屋を暖めておいてくれる者さえいない境遇そのものが、空しさと行き場のない破壊衝動を助長させている。

このさいフローリングにも腹が立つ。これから冷気が立ち上がっているのは体感からしてもあきらかなのだ。

「くそ」

誰もいないことをいいことに、よそでは口にもできない大人気ない愚痴をこぼす。

けれど、少しくらい口に出したところで罰も当たらないだろう。しかしそういう言動をすることで自身の人間性を陥れていることには重々気づいている。そしてそう自覚してはさらに腹を立てた。

「くそ、くそ、くそ」

原沢はコートを脱ぐことも忘れていた事に気づいた。乱暴に脱いで、椅子の背にひっかけた。

すると寒い。ストーヴはまだ、ちりちりとうなるだけで熱風をよこそうとしない。

目が乾くような腹立ちを覚えたとき、原沢は、ぐっ、とヴァイオリンを弾く姿勢をとっていた。頭を左に傾げ、左手で弦を押さえ、右手で弓を持つ。普通のそれよりも大きく振りかぶる。背中も使ってオーバーなアクションをする。目は瞑った。脳裏には目の前の指揮台で髪を振り乱す老人が浮かぶ。

『やめちまえ』

(そればかり言いやがって)

第三楽章の六小節目。いつもそこであのタクトは止まる。中型犬が吼えるような罵声をあびせられるのはいつも自分だ。乱れるのはティンパニー。しかし吼えられるのは自分。

(わけのわかんねえ指揮振りやがって。それで責任はコンサートマスターの俺だ)

だいたいこのあたりは特にひでえ、と原沢は思った。指揮というより海藻が波に揺られてねじれあっているようだ。そう思ってふと、原沢は自分の頬が緩んでいることに気がついた。

面白え。陽に照らされた浅瀬の海中。葉緑体をフル稼働させて身をねじり、安っぽく吼えたくる海藻。音波を伝えすぎるそこ、全ての命の源を内包するそこでは、いかに軽薄な鳴き声もさだめし名器ストラディバリウスの荘厳さをもって響き渡ることだろう。

原沢は笑った。それは小学生のような純粋な、原始的な脳の営みであり、また大人だけが獲得しえる、完璧すぎる真理と現実へのささやかな抵抗の手段であった。

ストーヴが、ブァンと音を立てて熱風を吐き出し始めた。

その音は、何か文句でもあるか、とでも言いたげに聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4114a/>

ストーヴ

2010年12月5日14時50分発行